

《研究報告》

本学における認知症サポーター養成講座を受講した看護学生の学びの活用 －臨地実習・地域での活用に焦点を当てて－

武田 智美, 又吉 忍, 川島 一晃, 早川 幸博

栢山女学園大学看護学部

要 旨

【目的】

本学は2019年より、看護学生（以下学生と略す）に対して認知症サポーター養成講座を開講している。本研究は、認知症サポーター養成講座受講した学生を対象とした。臨地実習や地域の中で、認知症サポーター養成講座の学びの活用の有無と、活用した内容を明らかにすることを目的とする。

【方法】

1年次に認知症サポーター養成講座を受講した学生34名を対象とした。認知症サポーター養成講座の学びから、臨地実習の中で活用の有無、地域の中で活用の有無と臨地実習の中で活用した内容、地域の中で活用した内容についてオンライン調査した。活用内容は、自由記述式のオンライン調査を行い臨地実習の中で活用した内容、地域の中で活用した内容は学生の考えと行動に着目し、意味ある文脈を抽出し、コード化した。意味の類似性・相違性に沿って分類を整理し、サブカテゴリーを抽出した。さらにサブカテゴリーを集約し、カテゴリーを抽出した。

【結果】

認知症サポーター養成講座を受講した学生24人より、調査の協力を得た。認知症サポーター養成講座の学びの活用については、臨地実習の中で活用できた学生は、16名（66.7%）。臨地実習の中で活用できなかった学生は、8名（33.3%）であった。地域の中で活用できた学生は、10名（41.7%）地域の中で活用できなかった学生は、14名（58.3%）であった。臨地実習の中で活用した内容は、【認知症を伴う療養者と高齢者への知識とイメージ】、【認知症を伴う療養者と高齢者が安心する姿勢】、【認知症を伴う療養者と高齢者安心するコミュニケーション】、【認知症を伴う療養者と高齢者を支える環境】の4カテゴリーが抽出された。地域の中で活用した内容は、【認知症を伴う療養者と高齢者の尊厳を守る】、【認知症を伴う療養者と高齢者を支える地域啓発活動】、【認知症を伴う療養者と高齢者の家族支援】、【アルバイトの中で認知症を伴う療養者と高齢者のサポート】、の4カテゴリーが抽出された。

【考察・結論】

認知症サポーター養成講座を受講した学生の学びの活用は、臨地実習では約7割であった。地域の中で活用は、約4割であった。学生の学びの活用内容は、臨地実習では、認知症を伴う療養者と高齢者に対する関わり方は【知識】を持ち【イメージ】化を図り、対象者が安心する【姿勢】と【コミュニケーション】の方法を考え、生活する【環境】づくりが必要と考えていた。地域では、【尊厳を守る】気持ちを持ち、安心して生活できるように地域での【啓発活動】や【アルバイトの中でサポート】していた。また、家族に認知症への理解を伝え【家族支援】をも行っていた。今後は、学生の臨地実習や地域の中で行動や得られた体験を学生間で共有する機会を設け、学びの深化につなげる。さらに、具体的な活用方法をイメージ化できる教授法にしていく。

キーワード：認知症サポーター、看護学生、学び、活用

I. 緒言

わが国では急速に高齢化が進んでおり、厚生労働省（2020）は、「団塊の世代」が75歳以上となる2025年を目途に、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。高齢化の進展とともに要介護高齢者をはじめ認知症を伴う療養者は急増している。厚生労働省（2022）は、我が国では、2025（令和7）年には高齢者の5人に1人、700万人が認知症になると見込まれており、認知症は、今や誰もが関わる可能性のある身近なものとなっている。社会の中で認知症療養者の生活を支えるケアが重要となってきた。厚生労働省（2015）は、地域で療養する認知症高齢者の支援として、「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」（新オレンジプラン）を内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省の11の府省庁と共同で策定している。新オレンジプランは、国民に広く認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進を促し、認知症について正しい理解と認知症の人や家族を温かく見守り支援する応援者として、認知症サポーターを養成している。認知症サポーターの養成は、市町村や職場などが中心なり実施されており、地域の中で認知症の理解を多くの方々に深め、支え合える地域づくりに寄与し、地域の中で期待され存在になると考える。

本学は、名古屋市千種区に100年以上の歴史を誇る私立女子総合大学であり、学園の教育理念は、「ひとを大切にできる人間」「ひとと支えあえる人間」「自らががんばれる人間」の3つとし、人と人との「絆」を重視し一貫した人間教育を目指している。大学として地域の行政との連携を積極的に行い、認知症の理解を深め、支え合い人と人との「絆」を結び支え合う地域づくりを推進していくことは本学の教育理念と一致し、大学として重要な役割であると考えている。本学は2019年より、認知症に関する動向や施策を基に「あいち認知症パートナー大学」に登録され、認知症を支える地域づくりとして活動を開始した。本学における「認知症の人々を支援する活動」は、1. 地域で能動的に活躍することができる認知症支援者の養成、2. 認知症サポーターを組織化し、活動の場を具体的に提案することで、地域での支援活動に能動的に参加する認知症支援者を輩出し、地域での互助・自助機能の醸成を促すこと、3. 本学の学生がこれらの取り組みに参加することで認知症への理解・関心を高めることを目的としている。2019年度からは、地域包括支援センターとの協働により看護学部1年生を対象とした認知症サポーター養成講座を実施している。東ら（2016）は、看護学生3年生に認知症サポーター養成講座を実施した調査からは、学生は実践前段階としての有効な学びを得たと報告していることから、本学において1年次に認知症サポーター養成講座を受講した学生を対象に、認知症サポーター養成講座の学びから、臨地実習や地域の中での高齢者や認知症を伴う療養者との関わりへの活用の有無と活用した内容を明らかにすることを目的とする。

II. 研究目的

1年次に認知症サポーター養成講座を受講した学生を対象に、認知症サポーター養成講座受講後、臨地実習や地域の中での高齢者や認知症を伴う療養者との関わりへの活用の有無と活用した内容を明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 用語の定義

地域とは、学生が生活する場（市、町、村など）活動する範囲と定義した。

Ⅳ. 研究方法

1. 認知症サポーター養成講座開催方法

1) 本学部教員5名は、2018年に認知症サポーター養成講座の講師資格（キャラバン・メイト以後、キャラバン・メイトと略す）を習得した。

2) 認知症サポーター養成講座の内容は、認知症サポーター養成講座標準テキスト（名古屋市版）を用いた。講師は、本学のキャラバン・メイトが行った。認知症サポーター養成講義のテキスト内容は、表1に示す。

表1 テキスト内容

I	認知症はひとつとはありません
	1. はじめに
	2. 認知症は身近な病気です
II	認知症と認知症の人を正しく理解する
	1. 加齢によるもの忘れと認知症によるもの忘れの違い
	2. 認知症を引き起こすおもな病気
	3. 認知症の初期症状とは
	4. 認知症の診断・治療
	5. 認知症の予防
	6. 認知症の症状 ～中核症状と行動・心理症状～
	7. 介護をしている家族の気持ち
	8. 認知症の人と接するときの心がまえ
III	「認知症の人にやさしいまちづくり」～認知症サポーターにできること～
	1. 「認知症になっても安心して暮らせるまち なごや」を目指して
	2. 認知症に関する相談先と認知症関連事業の紹介

3) 学生の講義受講者募集

本学のキャラバン・メイトより、認知症サポーター養成講座開催を周知した。2019年6月受講を希望した看護学部1年生、2年生に講義を行った。

2. 調査方法

1) 調査対象

対象者は、2019年度の看護学部1年生とした。認知症サポーター養成講座を受講した32名を調査対象者とした。現在は看護学部4年生である。

2) 調査期間

2022年5月15日～5月30日である。

3) 対象者への依頼方法

認知症サポーター養成を講座した32名の学生に対して、Google Formを用いてオンライン調査を依頼した。

4) 回答方法および回収方法

学生はオンライン調査に回答し、回収方法は、オンライン調査に回答後Web上での送信とした。オンライン調査に対する同意は、送信を持って同意を得た。

5) 調査内容

認知症サポーター養成講座での学びから、臨地実習および地域の中での活用の有無とその活用内容について自由記述により回答を求めた。

3. 分析方法

1) 臨地実習、地域の中での活用の有無、臨地実習、地域での活用の内容については、学生がありのままを記述したものを生かすために内容分析による方法を用いた。自由記述を熟読し、学生の考えと行動に着目した。内容が一文一義である意味を損なわない範囲内で区切り、抽出し、コード化した。コード化した意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化し、意味内容が類似するものをまとめてサブカテゴリー化し、さらに抽象度を高めカテゴリー化し、名称を付与した。

4. 倫理的配慮

調査対象者に対し、調査目的、調査方法、個人情報の保護、調査は拒否する権利があること、データの保管方法などについて Web 上で文書にて説明し協力を依頼した。調査への参加は自由意思に基づくアンケート調査であり、参加の有無は成績とは関係ないこととし、送信をもって同意したとみなし、返信後の調査研究協力の同意撤回・辞退は受け付けることができないことも合わせて説明した。本調査は、相山女学園大学看護学部研究倫理審査委員会にて承認を受けた（受付番号 187）。

V. 結果

1. 回答数および回収率

- 1) 対象者学生32名中、24人に調査協力があった。
- 2) アンケート調査回収率は 75.0%であった。

2. 認知症サポーター養成講座での学びから、臨地実習での活用と地域での活用有無

臨地実習で活用できたと回答した学生は16名（66.7%）であった。臨地実習で活用できなかったと回答した学生は8名（33.3%）であった。地域での活用については、地域で活用できたと回答した学生は10名（41.7%）であった。地域で活用できなかったと回答した学生は14名（58.3%）であった。表2に示す。

表2 認知症サポーター養成講座の学びの活用

		n=24	
		人	%
臨地実習	活用できた	16	66.7%
	活用できなかった	8	33.3%
地域活動	活用できた	10	41.7%
	活用できなかった	14	58.3%

3. 認知症サポーター養成講座での学びから、臨地実習で活用した内容

カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードは「 」で記した。 臨地実習の中での活用は、33の「コード」が抽出され、11の<サブカテゴリー>, 【認知症を伴う療養者と高齢者への知識とイメージ】 【認知症を伴う療養者と高齢者が安心する姿勢】 【認知症を伴う療養者と高齢者が安心するコミュニケーション】 【認知症を伴う療養者と高齢者を支える環境づくり】 4の【カテゴリー】から構成された。表3に示す。

表3 認知症サポーター養成講座での学びから臨地実習で活用した内容

【カテゴリー】(4)	<サブカテゴリー>(11)	「コード」(33)
認知症を伴う療養者と 高齢者への知識とイメージ	特徴を理解して関わる	高齢者や認知症の特徴について理解を深めながら関わる。 認知症の方が気持ちが穏やかになるよう知識をもって接する。
	学びをすり合わせる	介護老人保健施設の実習時、学びを通して認知症についてイメージ接した。 認知症について症状や状況をイメージ接する。
認知症を伴う療養者と 高齢者が安心する姿勢	気持ちを落ち着ける	認知症の患者さんと落ち着いて向き合う。 認知症の患者さんを受け持った時、落ち着いた姿勢で関わる。 認知症の患者さんと会話する時に活用した。
		認知症の患者さんとの関わり心に余裕を持ち関わる。 患者さんの状況と思いを真摯に向き合う。
	気持ちに心を寄せる	患者さんの思いをしっかりと受け止めた。 ゆっくり患者さんの心身に寄り添った。
		笑顔で接するようにした。 穏やかな表情で接するようにした。
認知症を伴う療養者と 高齢者が安心するコミュニケーション	相手に合わせる	患者さんのタイミングに合わせる。 患者さんのペースに合わせる。
	動揺せず受け止める	患者さんの状況に動揺しないように接する。 気持ちに余裕を持ち接する。 気持ちを落ち着かせて関わる。 物取られ妄想が出現した時など、否定せず向き合う。 物取られ妄想や認知症の徴候を理解して接する。
		言葉を受け止める
認知症を伴う療養者と高齢者 を支える環境	安心できる声掛けをする	安心できる言葉で関わる。 配慮した言葉で会話する。 警戒心を抱かせないように話す。
	恐怖心をあたえない	患者さんを驚かせないように前から話しかける。 患者さんに恐怖心を与えないように後ろから声をかけない。
		療養生活に心地よさをもたらす

4. 認知症サポーター養成講座での学びから、地域で活用した内容

カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードは「 」で記した。 37のコードが抽出され、11のサブカテゴリー, 【認知症を伴う療養者と高齢者の尊厳を守る視点】 【認知症を伴う療養者と高齢者に対する家族支援】 【認知症を伴う療養者と高齢者を地域の中で支援する啓発活動】 【アルバイトの中で認知症を伴う療養者と高齢者へサポート】 4のカテゴリーから構成された。表4に示す。

表4 認知症サポーター養成講座での学びから地域で活用した内容

【カテゴリー】(4)	〈サブカテゴリー〉(11)	「コード」(37)
認知症を伴う療養者と高齢者の尊厳を守る	その人の本来の姿と向き合う	本来のその人を知り支えたい。 しっかりとその人と向き合い支えたい。
	尊重した関わりをする	認知症の方の行動には意味のあると思う否定しない。 認知症の方も自分自身が混乱し辛い尊重した関わりをする。 認知症の人が見えている世界を理解し否定しない。 人生観や生活歴、価値観などを尊重した関わりをする。
認知症を伴う療養者と高齢者を支える地域啓発活動	認知症に対する支援に関心を寄せる	超高齢社会、認知症の方と接することは避けられない。 認知症について常に関心を持つ。 認知症についてニュースを確認する。 認知症の認定看護師に関心を持った。
	地域に認知症への理解を伝える	オレンジングをつけ認知症サポーターの存在を地域の中でアピールした。 周りの理解がとても大切であると伝える。 認知症の方への対応をアルバイト先で説明した。
	見守り声をかける	迷子になっていた高齢者に声をかけた。 地域の中で暮らす高齢者の方へ声をかけた。 困っている様子の方へ声をかけ手助けをした。
	認知症を支える町づくりを考える	近所や町内など全体で助け合う。 日頃から近所や町内など協力できる関係性をつくる。 地域での理解が大きな支援になる。 社会全体で認知症を理解する。 認知症について地域の中で知識を持った人が増やす。
認知症を伴う療養者と高齢者の家族支援	家族に認知症への理解を伝える	認知症サポーターとして、学んだことを家族に共有した。 家族が認知症になった時、認知症の症状について家族に説明した。 家族が認知症であり、ゆっくり話しかけることの大切さを家族に伝えた。
	特徴を理解し行動する	高齢者の気持ちや特徴を考え対応した。 高齢者の方の状態に合わせてコミュニケーションをとり買い物を手伝った。 コミュニケーション方法について学んだことが活用し高齢者に話しかけた。 認知症の方々の財布の中が小銭だらけという特徴を気にながら会計を手伝った。 認知症の方の傾向や様子を理解し会計を手伝った。
アルバイトの中で認知症を伴う療養者と高齢者のサポート	注視しペースを合わせる	会計時、お金がうまく出せず困っていた方に声をかけた。 高齢者の動作や動きを観察した。 スピードに合わせた対応をした。
	言葉に耳を傾ける感受する	高齢者の方に何度も同じ内容を聞かれても心で受け止めた。 同じ内容の話をされていても真摯に受け止めた。
	気持ちにゆとりを持ち関わる	高齢者の方へ対応は慌てさせないように意識した。 ひとつひとつ確認しながら余裕を持ち関わった。 気持ちに余裕を持ち関わった。

VI. 考察

1. 認知症サポーター養成講座での学びから臨地実習での活用内容

学生は、「高齢者や認知症の特徴について理解を深めながら関わる」、「認知症の方が気持ちがる穏やかになるよう知識をもって接する」とし、〈特徴を理解し関わる〉、〈学びをすり合わせる〉思考から【認知症を伴う療養者と高齢者への知識とイメージ】化を図っていた。南部(2017)は、看護学生の認知症サポーター養成講義による変化を調査し受講後は「認知症高齢者のイメージ」が肯定的となり、「認知症の基礎知識」が豊かになったと報告している。学生も高齢者や認知症を伴う療養者への肯定的なイメージを持ち、「認知症の患者さんとの関わり心に余裕を持ち関わる」、〈気持ちを落ち着ける〉行動をし、「患者さんの状況と思いを真摯に向き合う」、「患者さんの思いをしっかりと受け止めた」とし、〈気持ちに心を寄せる〉姿勢を持っていた。さらに〈穏やかに関わる〉、〈相手に合わせる〉ことや、学んだ知識を活用し「物取られ妄想や認知症

の徴候を理解して接する」など＜動揺せず受け止める＞ことを意識し【認知症を伴う療養者と高齢者が安心する姿勢】を持って行動していた。会話の際は、「何回も繰り返す話に耳を傾ける」、「話を遮らずに聞く」とし、＜言葉を受け止める＞ことや「患者さんを驚かせないように前から話しかける」、＜恐怖心をあたえない＞、＜安心できる声掛けをする＞とし、【認知症を伴う療養者と高齢者が安心するコミュニケーション】に心掛けていた。学生は、こうした関わりから「笑顔で接することは認知症の方々にとって生活が豊かになる」、「しっかりと患者さんと向き合うことで徐々に落ち着きがみられる」ことを体感し「生活の中で心地よい関わりをする」ことから、＜療養生活に心地よさをもたらす＞ことを知り【認知症を伴う療養者と高齢者を支える環境】づくりに関心を寄せていた。足立（2008）は、「望ましい看護」とは看護を受けるもの（家族を含め）が快く感じ、安心し、落ち着き、究極の姿として「微笑み」があらわれる看護と述べている。上記の結果から、学生は認知症を伴う療養者や高齢者に対して笑顔で接し、入院生活や療養生活の中に快さと落ち着いた安心感のある関りから「微笑み」が生まれるような関わりを思考し行動したことが伺えた。調査対象とした学生は、2019年度末以降新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、多くの施設での臨地実習受け入れが中止となることも多く、臨地実習の中で入院患者や療養者と関わる機会が少ない。日本看護系大学評議会（2021）は、全国の看護系大学の教員を対象とした2020年度COVID-19に伴う看護学臨地実習への影響調査から、臨地実習の短縮や中止により、臨床で患者や臨地実習指導者と直接関わる機会の減少に伴う学習環境の変化や、医療者として身に付けるべき人間関係の形成への課題、臨地実習内容の変更により看護技術の獲得といった学習内容に課題があると指摘している。臨地実習の中で認知症サポーター養成講座の学びを活用できたと回答した学生は16名（66.7%）に留まったが、Matsudaら（2018）は、看護学生に対する認知症サポーター養成は、看護師と同等のレベルまで、十分な知識と早期治療の重要性を学び、看護学生に教育的利益があると述べている。学生は、短縮された臨地実習の中でも学びを活用できた様子が伺える。上記の結果から、学生にとって認知症サポーター養成の学びは、With コロナ、Post コロナ時代においても認知症を伴う療養者や高齢者への理解を深め、認知症を伴う療養者や高齢者と良好な関わりを形成する手掛かりになっていたと考える。

2. 認知症サポーター養成講座での学びから、地域での活用内容

学生は、「本来のその人を知り支えたい」、「しっかりとその人と向き合い支えたい」としくその人の本来の姿と向き合う姿勢を持っていた。「認知症の方の行動には意味のあると思う否定しない」、「認知症の人が見えている世界を理解し否定しない」、「人生観や生活歴、価値観などを尊重した関わりをする」とし、＜尊重した関わりをする＞ことの重要さに気づき【認知症を伴う療養者と高齢者の尊厳を守る】視点を持っていた。また、「家族が認知症になった時、認知症の症状について家族に説明した」とし【認知症を伴う療養者と高齢者の家族支援】を行い、「認知症についてニュースを確認する」、「認知症の認定看護師に関心を持った」とし、認知症サポーター養成講座後も＜認知症に対する支援に関心を寄せる＞姿勢を持っていた。さらに、学生は「地域の中で暮らす高齢者の方へ声をかけた」とし、＜見守り声をかける＞ことや「オレンジリングをつけ認知症サポーターの存在を地域の中でアピールした」など、＜地域に認知症への理解を伝える＞行動を行っていた。同時に「日頃から近所や町内など協力できる関係性をつくる」とし、＜認知症を支える町づくりを考える＞視点を持ち【認知症を伴う療養者と高齢者を支える地域啓発活動】を行っていた。特にアルバイト時は、「高齢者の気持ちや特徴を考え対応した」、「会計時、お金がうまく出せず困っていた方に声をかけた」、「高齢者の動作や動きを観察した」、「スピード

に合わせた対応をした」とし認知症を伴う療養者と高齢者を「<注視しペースを合わせる>」ことから高齢に配慮した行動をしていた。伊藤ら（2022）は、認知症の人の混乱を軽減するための対応として、本人が困っていることに焦点をあてて解決するアプローチが重要であると述べている。学生は、困っていることに目を止め、「<気持ちにゆとりを持ち関わる>」ことから【アルバイトの中で認知症を伴う療養者と高齢者のサポート】を行っていた。

以上のことから、本学における看護学部1年生を対象とした認知症サポーター養成講座は、看護学生として臨地実習や地域の中において認知症サポーターとして参画する有効な学びになっていたと考える。諏訪ら（2019）は、フィンランドの認知症看護・ケアでは高齢者が直面している様々な課題の解決を目指すプロジェクトに学生がリーダーとして参画するなど、地域での実践的な学習が展開されていたと報告し、日本においても、看護基礎教育の中に認知症看護教育を確立することが期待されると述べている。しかし、認知症サポーター養成講座での学びを地域の中で活用できたと回答した学生は、10名（41.7%）の活用状況に留まり、一方で活用できなかったと回答した学生は一定数存在した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大から社会活動参画に対する制限や、ボランティア活動に参加する機会が少なかった背景が予測される。

3. 本学における認知症サポーター養成講座の教授法の検討

本学において、With コロナ、Post コロナ時代の中で認知症サポーター養成講座は、遠隔学習や実際の臨床に触れる機会が減少したことを補完する意味で有効であったと考える。本学は、認知症サポーター養成講座を継続的に実施し、地域の行政や地域包括支援センターと連携を積極的に行い、認知症への理解を深め、人と人との「絆」を結び、支え合える地域づくりを推進する役割がある。中野ら（2020）は、認知症サポーター養成講座を受けた看護学生の学びが臨地実習や実際に認知症にかかわった看護に対しての教育効果で評価できていないため、対象学生が実際に認知症の人とかかわる中で教育効果を再評価する必要性を述べている。看護教育に必要な視点を踏まえ、受講後は学生の認知症サポーター養成講座の知識の定着と学びの活用方法をフォローアップしていき、定期的に教育効果を確認していく必要がある。また、認知症サポーター養成講座受講後、認知症を伴う療養者や高齢者との関わりを学生間で語る場を設け、得られた体験を共有し学びを深化していく時間が必要と考える。永井ら（2021）は、認知症の人のポジティブな側面に焦点を当てた認知症サポーター養成講座を増やすことが必要と述べ、学生自ら与えられた学びからポジティブな意思を持ち、引き寄せて学び、行動していく支援にいかにつなげるかが重要な課題にあると考える。兼松ら（2022）は、看護系大学1年生の認知症高齢者へのイメージについて、学生は、身の回りのことができないというマイナスイメージを抱いているため、認知症であってもできることすなわち、「強み」にフォーカスするような、「目標志向型思考」へ導くこと、認知症重症期の看護について教育支援の必要性を述べている。大塚ら（2021）は、現代では能力主義的な人生観、価値観が、人の評価のうえで大きなウエイトを占め、認知症への偏見を生む土壌になっているとも述べている。入学年度より、認知症状や認知機能に焦点を当てた看護のみの視点ではなく、看護を学ぶ初学者へ、常にその人らしい「人生観」、「価値観」を尊重し、認知機能の低下に対して肯定的な「感情」を生む教授法と、その人の「強み」に注目する意図的な教授法が必要になると考える。また、認知症サポーター養成講座の学びを具体的に活用する方法をイメージ化できる教授展開にしていくことが重要と考える。こうした本学における認知症サポーター養成講座の教授法から、認知症の理解を深め、人と人との「絆」を結び支え合う、本学の目指す人間教育は高まり、学生自身が社会を支える一員としての役割を考える機会となる。さ

らに、看護基礎教育において認知症看護教育の導入につながるのではないかと考える。

Ⅶ. 研究の限界

本研究の限界は、2019年度に認知症サポーター養成講座を受講した看護学部1年生を対象とし、受講した学生は、現在看護学部4年生である。受講後と調査期間に時間的な経過が生じている。また、学生の日々の暮らしの中での経験から認知症の人々を支援する視点や考え、行動に影響があったことも予測される。今後は、臨地実習や地域での活用の有無を経時的に調査し、学生の変化を調査し評価していくことが課題である。

Ⅷ. 結論

- 1) 認知症サポーター養成講座を受講した学生の学びの活用は、臨地実習では約7割であった。地域の中での活用は、約4割であった。
- 2) 臨地実習での活用は、認知症を伴う療養者と高齢者に対する関わり方の【知識】と【イメージ】化を図り、対象者が安心する【姿勢】や【コミュニケーション】の方法を考え、生活する【環境】づくりが必要と考えていた。
- 3) 地域での活用内容は、【尊厳を守る】を持ち、認知症を伴う療養者と高齢者が安心して生活できるように【啓発活動】や【アルバイトの中でサポート】を積極的に行っていた。また、家族に認知症への理解を伝える【家族支援】を行っていた。
- 4) 学生の臨地実習や地域の中での行動や得られた体験を学生間で共有する機会を設け、学びを深化につなげる。
- 5) 認知症サポーター養成講座の学びを具体的な活用方法にイメージ化できる教授法にしていく。本学における認知症サポーター養成講座の教育効果の向上につなげる。

引用文献

- 足立紀子. (2008). 足立紀子の在宅看護とは何か. 東京: 医歯薬出版株式会社.
- 東久子, 星智子, 新田幸子 (2017) 看護学生が受講した「認知症サポーター養成講座」での学び. 兵庫大学論集, 21, 131-140.
- 伊東美緒, 菅亜希子, 島田千穂, 他. (2022). 地域で生活する認知症高齢者が混乱する環境要因と対応. 認知症ケア研究誌 6, 1-12.
- 兼松由紀子, 樋田小百合, 平澤園子, 他. (2021). 看護系大学1年生が抱く認知症高齢者のイメージ 学生のレディネスに応じた老年看護学教育の在り方の検討(福祉と看護の研究誌 8, 79-86
- 厚生労働省. (2015.1.27) (2015). 「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)」について. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000072246.html> (2022.8.10 閲覧). 厚生労働省. (2020). 地域包括ケアシステムの実現に向けて. https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/huk_ushi_kaigo/kaigo_kour_eisha/chiiki-houkatsu/. (2022. 8. 5閲覧).
- 厚生労働省. (2022). 厚生労働白書 令和4年版 第7章 国民が安心できる持続可能な医療・

介護の実現.

- 中野涼子, 寺本珠真美, 中野 雅子. (2020). 地域包括支援センター・キャラバン・メイト との連携による看護学生への『認知症サポーター養成講座』の試み. 総合研究所所報 第21,21,13-20.
- 永井邦明, 川崎 一平, 原田瞬, 他. (2021). 認知症の人と共生する社会の実現に向けた「認知症サポーター養成講座」の在り方に関する研究 地域で働く人がもつ認知症のイメージに関する実態調査から. 日本認知症予防学会誌 10, 2, 14-20
- 日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会. (2021.4.30) 2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への影響調査: A 調査・B 調査報告書.
<https://www.janpu.or.jp/wp/wpcontent/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf>. (2022.8.5 閲覧).
- 南部泰士. (2017). 認知症サポーター養成講座受講による看護学生の認知症高齢者に関する意識変化. 厚生指標 64,6, 21-28.
- 大塚智史. (2021). 認知症の人の心を知り,「語り出し」を支える. 東京:中央法規出版株式会社.
- 諏訪さゆり, 辻村 真由子, Kitinoja Helli, 他. (2019). フィンランドの看護師とゲロノミの基礎教育課程における認知症看護・ケアの教育セイナヨキ応用科学大学の先駆的な実践. 千葉大学大学院看護学研究科紀要 41, 93-100.
- Yukihisa Matsuda, Reiko Hashimoto, Sachiko Takemoto, et al (2018). Educational benefits for nurses and nursing students of the dementia supporter training program in Japan. PLoS One.13, 8.

Utilizing Learning of Nursing Students who Have Taken the Dementia Supporter Training Course at Our University - Focusing on clinical training and the community -

Tomomi Takeda, Sinobu Matayoshi, kazuaki Kawashima, Yukihiro Hayakawa

School of Nursing, Sugiyama Jogakuen University

Summary

[Purpose] Our university started a dementia supporter training course for nursing students (hereinafter referred to as "students") in 2019. The purpose is to clearly report on the relationship and behavior with the elderly and patients with dementia through clinical training, their own life, and the community after the course.

[Method] An open-ended questionnaire survey was conducted online with 34 students who had taken the dementia supporter training course about "useful situations" and "useful contents" as a dementia supporter, based on the course contents. Descriptive statistics were used for the useful situations, and students' thoughts and actions were focused on the useful contents. Meaningful contexts are extracted and coded. These codes were classified and sorted according to similarities and differences in meanings, and subcategories were extracted. These subcategories were then aggregated and categorized.

[Results] The survey was responded to by 24 students who attended the dementia supporter training course. Of them, 16 students (66.7%) successfully applied what they had learned in clinical training after completing the dementia supporter training course. In their daily lives and communities, 10 students (41.7%) used their learning. In respect of the useful contents, the following four categories were extracted for the utilization in clinical training: [knowledge and image of patients and the elderly with dementia], [attitude which allows patients and the elderly with dementia to feel safe], [communication which allows patients and the elderly with dementia to feel safe], and [creation of an environment to support patients and the elderly with dementia]. The following four categories were extracted for the utilization in their daily lives and communities: [perspective to have respect for patients and the elderly with dementia], [awareness-raising activities to support patients and the elderly with dementia in the community], [support for families of patients and the elderly with dementia], and [community support for patients and the elderly with dementia through part-time jobs].

[Conclusion and implications] After taking the dementia supporter training course, the students attempted to [acquire knowledge and form an image] of dementia in clinical training and consider and adopt [attitude] and ways of [communication] to allow patients and the elderly with dementia to feel safe in having a relationship with the elderly, patients, and living people with dementia. In addition, they were aware of their role as a dementia supporter in their daily lives and communities, and actively provided [community support for patients and the elderly with dementia through part-time jobs]. In the future, students will occasionally be given the opportunity to share useful actions to help themselves in clinical training and communities, as well as experiences gained. That will contribute to developing their supporting capacity, knowledge, and skills as dementia supporters and nursing students. From these activities, our university will promote the quality of "activities to support people with dementia," which will lead to further development.

Keywords: dementia supporter; nursing student; learning, utilization